

開催日時：	2004年10月4日（木）13：05～17：20
場 所：	ぱるるプラザ京都 5階 A会議室
参加者数：	WGメンバー委員19名、WGメンバー外委員7名、河川管理者（指定席）32名 一般傍聴者（マスコミ含む）89名

## 1. 審議の概要

### 河川管理者提供資料に係わる検討

今本委員より本日のダムWGの進め方について説明が為された後、河川管理者から提供資料について説明がなされ、意見交換が行われた。

### 河川整備計画の目標に関する意見交換

河川管理者より河川整備計画の目標のうち、特に洪水について説明された後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り（例示）。

- ・まず、確認したい。狭窄部上流に対しては既往最大規模の洪水を目標にする。狭窄部の下流についてはいかなる洪水に対しても破堤による被害の回避・軽減を目標にするということによいか（ダムWGリーダー）。

破堤による被害の回避・軽減は、狭窄部の上流や下流を問わず、堤防があるところを対象としている。堤防が壊れると甚大な被害が発生するので、いかなる洪水も対象にした破堤の回避・軽減を目標としている。ただし、現に浸水被害が頻発している狭窄部上流については、浸水被害の軽減のために既往最大規模の洪水を対象にしている（河川管理者）。

### 「既往最大規模」の考え方に関する意見交換

河川管理者より、資料1-1「既往最大規模の洪水の考え方について」を用いて説明が為された後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り（例示）。

- ・前回のダムWGで、委員会と河川管理者で「既往最大規模」の捉え方にズレがあり、「既往最大規模」を既往最大流量とするか（委員会）あるいは、既往最大の雨量を様々な降雨パターンで引き伸ばすか（河川管理者）という点で意見が違っていた。既往最大流量を対象にするのであれば、河道を掘削して小規模の遊水地を新設すれば対応できる。しかし、以前の計画に較べて治水安全度は低くなる。これまでの地元との経緯を考えれば、行政として無責任な話ではないかということで、既往最大雨量を対象にさまざまな降雨パターンを用いた検討をしていきたいと考えている。もちろん、だからといってダムが必要ということではなく、遊水地や他の代替案を含めて、どのような対応していくかを検討していく（河川管理者）。
- ・「住民の理解が得られないから、既往最大降雨による洪水をさまざまな洪水パターンを用いて検討する」とのことだが、まずは、既往最大規模の実績流量を用いた検討をすべきではないのか。さまざまな洪水パターンを用いて検討をするから、委員会と河川管理者の間で混乱が生じているとも言える（ダムWGリーダー）。

「既往最大流量」を対象にするという考え方の他にも「既往最大雨量」という考え方もあるということで、今回の検討結果を示した。今後も、あらゆる降雨について考えていかななくてはならないと考えており、1.1倍から1.5倍まで、0.05倍単位で計算して評価していこうと考えている（河川管理者）。

- ・岩倉峡の現在の疎通能力が明らかにされていない。傍聴者からもたびたび指摘を受けているが、

河川管理者は、岩倉峡の現在の疎通能力と狭窄部上流の水位流量曲線をきちんと可及的速やかに示して欲しい。後日、あらためて資料としてまとめて提出する（河川管理者）。

- ・資料のまとめ方に疑問が残る。「住民の理解は得られない」とまとめられているが、河川管理者は、住民に理解してもらえそうな対策を考えて説明していかなくてはならない。まとめの部分は、次のように変更して頂きたい。「上野遊水地・河道掘削・堤防強化およびその他有効な手段を講じることにより、これまで地元を示してきた計画による効果以上の効果を上げるべく努力します」と変更してもらおうよう希望する。

#### **流下能力 1500m<sup>3</sup>/s 整備に関する意見交換**

河川管理者より、資料 1-2「琵琶湖～宇治川までの流下能力 1500m<sup>3</sup>/s 整備について」を用いて説明が為された後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り（例示）。

- ・滋賀県が琵琶湖沿岸でどのような開発を行ってきたかを知りたい。そのために、琵琶湖総合開発以前の琵琶湖の水位ゼロの沿岸線と開発後の水位ゼロの沿岸線を比較した資料を提出して欲しい。準備したい（河川管理者）。
- ・今回のシミュレーションは、既往最大雨量を用いたのか（ダムWGリーダー）  
今回用いた昭和 36 年 6 月は既往第 2 位。既往最大雨量は明治 29 年だが、シミュレーションに足るデータが不足しているため昭和 36 年 6 月を用いた（河川管理者）  
仮定であっても構わないので、明治 29 年の既往最大雨量で検討してみるべきだろう。

#### **サブWGからの報告と意見交換**

3ダムサブWG、川上ダムサブWG、余野川ダムサブWGのリーダーより、それぞれ資料 2「3ダム関係」、資料 3-1「川上ダムについての検討状況と課題」、資料 3-2「川上ダムの目的と代替案に係わる検討資料」、資料 4「余野川ダムの議論について」を用いて、サブダムWGでの検討状況および検討結果について報告が為された後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り。

- ・仮に委員会が「ダムは好ましくなく、代替案で対応すべき」という結論を出した場合、代替案の予算が確保できるのか、憂慮している。論理的にダムが好ましくないという結論が出たとしても、ダムの地元が危険なままだと、委員会として答申するのに大きな悩みを伴う。ダムに協力してきた方々や地元のために、地方自治体の管理区間を直轄区間に変更する等の特別な配慮を考慮して頂きたい（ダムWGリーダー）  
流域委員会には大きな悩みとともに審議して頂いていると思っている。河川管理者も同様に悩みながら最終的な結論を出していくことになる（河川管理者）。
- ・ダムをつくるための予算システムはかっちりと出来上がっているが、ダム撤退や代替案に関する予算や手法については、まだ分からないことが多い。ダム代替案が実現できなかったとしても、一体何がネックになってうまくいかなかったのかを明らかにするべきだ。流域委員会は、ダム撤退の手順や手法を明らかにするための良い機会だと思っている。
- ・川上ダムサブWGでは、河川管理者から示された代替案を検討し、その結果を示した（資料 3-2）。一方、3ダムサブWGや余野川ダムサブWGでは、課題や問題点が示されているだけで検討の結論がいまだに示されていない。時間的にも限られているので、次回のダムWGまでに、ある程度の結論を出す必要があるのではないか。
- ・塔の島地区の 1500m<sup>3</sup>/s 整備は、河道掘削ではなく、引き堤で実現して欲しい。天ヶ瀬ダムができる以前の塔の島地区の川幅が分かる航空写真を見せて欲しい。

航空写真については、資料 1-4 P3~4 で、昭和 36 年頃の航空写真を掲載している。塔の島地区の川幅はそれほど変わっていない（河川管理者）

## 2. 一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者 4 名より発言があった。主な意見は以下の通り。

- ・丹生ダムや川上ダムは水資源機構が計画しているダムである。ダムの目的から、都市開発用水の確保が消えるのであれば、ダム建設は凍結すべきだ。既成事実としてダム建設が進んでいけば、ダム撤退に伴う費用負担の話がまとまらず、大阪府営水道等の利水者がダムから一層撤退しにくくなる一方である。流域委員会にはダム凍結の緊急提言を行って頂きたい。
- ・川上ダム建設に伴う県道の付け替え工事が進んでいる。この場所は川と川に挟まれた地域で生物の宝庫となっている。すぐに中止して頂きたい。
- ・河川管理者は資料 1-1 で「既往最大規模」として時間雨量を均一に引き伸ばしているが、科学的な手法ではない。既往最大雨量 319mm を記録した昭和 57 年の降雨は、ふた山降雨であったにも関わらず、この総雨量を他の降雨パターンで引き伸ばす方法は明らかにおかしく、恣意的だ。
- ・資料 1-4 で示された塔の島地区のフォトモンタージュを見て、ますます塔の島地区の河道掘削は認められないと思った。1500m<sup>3</sup>/s をめぐる上下流の経緯は理解できるが、琵琶湖沿岸の浸水被害に 1500m<sup>3</sup>/s 放流がどれだけの効果があるのか、疑問だ。琵琶湖の水位上昇と被害状況の変化に関する資料で詳細に検討する必要がある。また、資料 1-2 P5 の放流量と水位低減量のグラフがあるが、平成 15 年 11 月 17 日の作業部会の資料 2-2 補足のグラフと違うデータが出ている。何故違うデータが出ているのか、検討して欲しい。
- ・河川管理者による異常湧水について、いくつかのシミュレーションが示されているが、委員会は条件を変えたシミュレーションをするよう河川管理者に要求して欲しい。現在は、BSL - 90cm を切ってはじめて流量調整を実施しているが、これを - 45cm に変更すれば、かなりの効果がある。
- ・先日、姉川・高時川川づくり会議が開催され、ダム + 河川改修という案以外に、5 つの代替案とそれぞれのコストが示された。代替案のコストをどのように評価するべきか、ダムWGであらかじめ準備的な議論をしておいた方がよい。

## 3 今後のスケジュールについて

庶務より、資料 5 を用いて、今後の開催スケジュールについて説明が行われた。

このお知らせは委員の皆様に必要な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させていただくものです。